

主要通貨（円、ドル、ユーロなど）の銀行間取引は、ほとんどが電子ブローキングシステム（EBS）で行われ、米欧日の3台のスーパーコンピュータを経由し世界中の注文をマッチングさせる。

銀行のトレーダーたちは、時々刻々変化していく為替レートを見ながら専用線につながる端末のキーをたたいて売買の注

ミリ秒と情報漏えい

東京大教授 伊藤 隆敏



文を出していくが、数年前からEBSが売買注文を銀行のコンピュータから直接にEBSコンピュータにつなげることを許すようになった。銀行のコンピュータが為替レートの変化を読み取りながら自動的に売買注文を出す。

このような世界では、EBSコンピュータまでの通信の速度が問題になる。EBSサーバーの近くに銀行のトレーディ

ング用サーバーを置くことで、他行より一瞬（100ミクロ秒単位）早く注文をEBSコンピュータに出そうというわけだ。しかしコンピュータが自動的にできない部分もある。日銀の金融政策決定会合後の総裁会見やGDP（国内総生産）など政府統計の解釈である。GDP統計は四半期に1回、決められた発表日の午前8時50分に発表される。発表の瞬間から数分が勝負で、他行より早くポジションをとり、他行が追いついてきたと

ここで売り抜けるのがもうけるコツだ。情報の解釈や注文発注でミリ秒を競う戦いだ。

このような世界で、GDP統計を30分も早く経済産業相が「情報漏えい」していた。10ミクロ秒を競う百対競走で、5秒先にスタートさせるようなものだ。今回の件で、東京市場には、発表前に情報を得ているインサイダーがいるのではないかと疑念を抱かせてしまう。重要な政府統計の情報を発表前に渡すのは担当相と首相に限定すべきだ。

このように、銀行のトレーダーたちは、時々刻々変化していく為替レートを見ながら専用線につながる端末のキーをたたいて売買の注